さと子ばあちゃん

「おばあちゃんは、むずかしい字、読まれへん。だから、人権センターの識字学級で字を習ってん。」

さと子ばあちゃんの言葉を聞いて、ぼくは本当にびっくりした。

それは、総合学習で校区にある人権センターをくわしく調べることになったと、家で話題にした時のことだ。

「何で字を読まれへんの？　学校に行ってなかったん？」

しばらくだまっていたさと子ばあちゃんは、自分の子どものころの話をしてくれた。

おばあちゃんが子どものころは、差別がきつかったんや。おばあちゃんの父ちゃんも母ちゃんも、日やといの仕事をしてて、すごく生活が苦しかった。雨がふったら仕事がないし、食べるものにも困ってたんや。それで、子どもの時から子守ぼう公に行かなあかんかってん。学校には一度も通ってないねん。子どものころからずっと働いてきたんやで。

それで、ひらがなも読み書きできないまま、大人になってしまってん。字を知らんかったら、困ることばっかりや。電車やバスにも一人で乗られへん。

買い物も不自由したし、病院や銀行で『ここに住所を書いて。』と言われた時は、ものすごくはずかしかったし、つらかったんやで。

字を知らん人が、むらの中にはたくさんいたんや。字を知らんかったら、働きたくても働かせてくれる所がすごく少ない。そして、生活するのも苦しくて、子どもを学校に行かすのもしんどくなってしまう。

それで、あんたのお母さんが子どものころに、むらの人たちで差別をなくすためにはどうしたらいいんやろうと相談した。そこで、差別をなくすための活動ができる人権センターが必要やという話になったんや。そのあと、市役所の人たちと何日も何日も夜おそくまで話し合って、ようやく人権センターを建ててもらったんやで。

その中に、字を習ってない人たちが字を習うための識字学級もできたんや。本当は差別で字を学ぶ機会がうばわれてきたんやけど、字を知らん人の多くは、それは自分のせいやと思いこんでる。自分のはじやと思てるから、初めは参加する人が少なかったなあ。

いろんな理由で学校に通われへんかったよその地区の人にも、識字学級でいっしょに字を学ぼうと、みんなで声をかけていったんやで。『むらの人ががんばって識字学級作ってくれたから、おばあちゃんらも助かってる。字が読めるようになったら、世の中明るくなったみたいや。』という声もよう聞いたわ。

病院内の調理員として働き出したときのことや。入院している人の料理は、一人一人調理の仕方がちがう。もしまちがえたら大変や。けど、おばあちゃんはメモに書いてある字が読まれへん。はずかしかったけど勇気を出して、職場の人にそのことを言うたんや。そしたらみんながわかってくれて、字で書かれたメモの代わりに色のシールをはることになってん。みんなに助けられたことがうれしくて、なみだが止まらなかった。けど、助かったのは、おばあちゃんだけやなかったんや。色のシールにすることで、調理の仕方が一目でわかる。調理師のみんなが便利になった言うて、感謝されたんやで。

人権センターは、識字学級だけじゃない。今は多くの市民のために使われている。差別をなくしていきたいというむらの人たちの願いで人権センターは建てられたそうだが、今では他の地区の人たちも安心して集えるみんなの居場所となり、むらの人たちやほかの地区の人たちとの交流が活発に行われている。むらの人たちだけでなく、多くの市民の役に立っている。

そして、さと子ばあちゃんも、今は胸を張って生きている。

ぼくは、人権センターのことを調べる学習が、とても楽しみになってきた。